

法が奏功し良好な flow が得られたと考えられる症例を経験した為、若干の文献的考察を加え報告する。

8. Osler-Rendu-Weber 症候群の先天性動静脈瘻による慢性呼吸不全に対する経皮的塞栓術が奏功した一例

(東京医科大学茨城医療センター 循環器内科)

東 寛之、東谷 迪明、阿部 憲弘
木村 一貴、小松 靖、岸 翔平
鈴木 利章、落合 徹也

症例は74歳の男性。Osler-Rendu-Weber 症候群と診断され、50×50×50 mm 大の肺動静脈瘻を有していた。呼吸困難が進行するため2013年から3L鼻カヌラで在宅酸素療法を導入されていたが、外科的手術は拒否されていた。2017年夏、

呼吸困難増悪のため入院した。入院時3LカヌラでSpO₂は90%以下であり、肺動静脈瘻による低下と考えられた。翌日、動静脈内瘻から左房への流入を止めるために経皮的コイル塞栓術を施行すべきであると判断した。19個のコイルと2つのAmplatzerプラグを用いて、経皮的コイル塞栓術に成功。呼吸状態は経皮的コイル塞栓術直後より良好となり、SpO₂は大気中で98%まで改善、その後も酸素化なく退院となった。肺動静脈瘻(PAVF)は肺の稀な血管奇形(PAVM)であり、右から左の肺内シャントによる重度の低酸素血症を引き起こす可能性がある。この報告では、経皮的コイル塞栓術が先天性肺内動静脈瘻の手術の代替治療中となる可能性があると考え、貴重なケースと思われるのでここに報告する。